



## よくきき、かんがえ、きめ、つたえる子

愛隣幼稚園の保育目標について連続で書かせていただいた「園だより」も最後になりました。よくきき、かんがえ、きめ、つたえる子 話を聴き、様々な情報を集め、それをもとに自分で考え、自分で決める。さらに、その意見を周囲に伝えていく。それはまた、新しい意見のやりとりに発展し新たな展開が生じる。また、考える・・・子どもたちの活動はぐるぐる回りながら高まり、充実していきます。幼稚園が子どもたちのものになっていきます。これは幼児にはかなり高度な目標のように感じます。しかし、子どもたちはそれが出来る事を見せてくれます。3歳の頃、言葉より先に手が出る子どもたちです。大人が介入して言葉で気持ちや考えを表すことを繰り返し伝えます。「聴く」ことも同じように、丁寧に伝えていきます。「話す」「聴く」この両方がある初めて双方向のコミュニケーションが成立します。そして年中はごんごんの時代に突入します。成長と共に、自他の違いに気づき、自分に自信がなくなったり、存在に不安を覚えたりするので小さな集団を作り、時に排他的になります。端から見ていても不安になりますが、本人たちが一番不安です。主張が強くなり、相手の話がなかなか聞き入れられず、分かっている「うん」とは言えません。自分の存在が危うくなりそうだからです。しばらくは大人の介入が必要です。聴いてもらい、一緒に考えてもらい、それでやってみたら“なんだかよかった”“楽しかった”という経験が足元を固めていきます。私を認められる(聴いてもらう)ことが、他者を認めることに繋がり、少しずつ大人が居なくても仲間の話を聴き、一緒に「考える」ことができるようになっていきます。仲間の中で安心して自分を発揮できるようになっていきます。そして年長にもなれば、問題は自分たちで解決していきます。話して聴いて考えて、決め、伝えることができるようになります。簡単に書きましたが“自分で決める”のには勇気が必要です。考えず決めずにみんなと一緒になら安心です。でも、愛隣では“自分で考えて決める”ことを大切にしたいと願い、子どもにもそうしていいと伝え続けています。それで、合宿の時などに係り決めをすると、男の子の中に女の子が1人ということも当たり前起こるのです。それで誰も何も言いません。よく考え勇気を出して自分で決めたことは、仲間の中で承認されるという経験が、子どもを支えています。ここまで書いてきて感じます。聴くことも、考えることも、決めることも、それをするための時間が保障されなければならないのです。でも大人には時間がないので、すぐに結果を見たいがります。こうすれば間違いはないと答えを提示します。子どもの大事な時間を奪っていることに気付かなければと思います。そして“伝える”。その相手は仲間だけではありません。小さい仲間や大人にも伝えます。当たり前ですが大人も聴きます。そして対話し、考えながら共に愛隣の生活を作っていきます。幼稚園は小さい社会ですが、そこにも民主的な社会の有り様が実現されていなければならない、と私たちは考えています。いつも一方的に大人の話や聞かされ、思考停止のまま、結論は既にあり従うばかりでは、主体性も尊厳もありません。自分の目で見、耳で聴き、心で感じ、自分で考え、自分で決め伝えることができる子どもを育てることが教育の目指すところであり、それが愛隣の願う子どもの姿です。

幼稚園教育要領が改訂され実施されたことを受け、愛隣幼稚園の保育目標を5回にわたって取り上げてきました。これは1989年に立てられた保育目標ですが、この夏の研修会で教育学者の汐見稔幸氏から「21世紀の教育・保育は、1、身体を動かすことが大好き！ 2、自分で考えることが大好き！ 3、人と関わるのが大好き！ こうした子どもに育てることに尽きる。」というメッセージをいただきました。愛隣が願ってきた子どもの姿と、この3つが大好きな子どもの姿が重なっていました。私は「よっしゃー！」と思わずガッツポーズでした。時間をかけ吟味してこの目標を立ててくださった先達に感謝します。自信をもって、でも自信は過剰にならないように、子どもの姿を見失わず、未来に繋がる保育を積み重ねていきたいと思えます。保育者も親も、子どもとの日々の出来事に翻弄され、目標や願いを忘れ度々道に迷います。そんな時には立ち止まり深呼吸して、「わたしは一体何がしたかったんだろう。どんな子どもに育ててほしいと願っていたんだろう。」と自分に聞き、子どもの声を聴くことを忘れずにいたいと思えます。